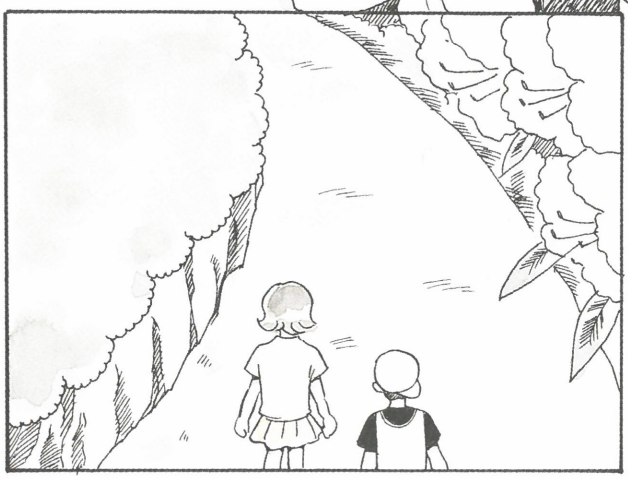
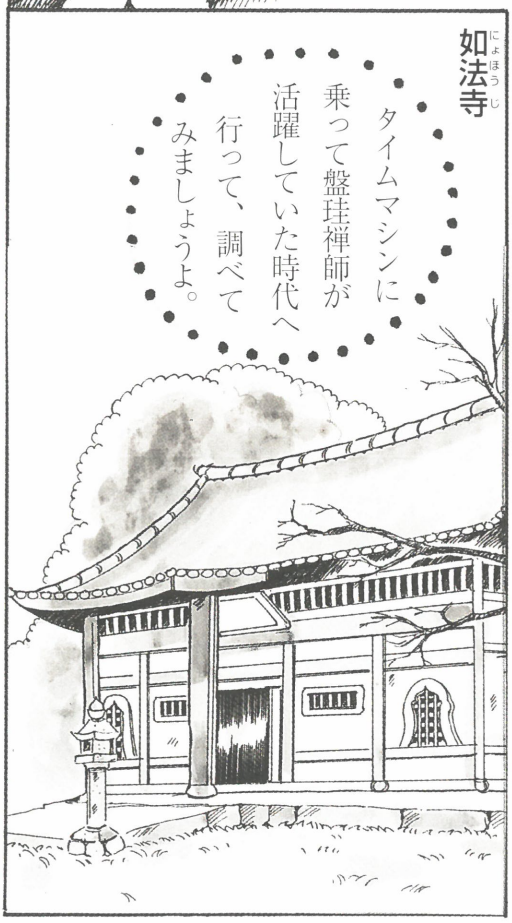
盤珪禅師





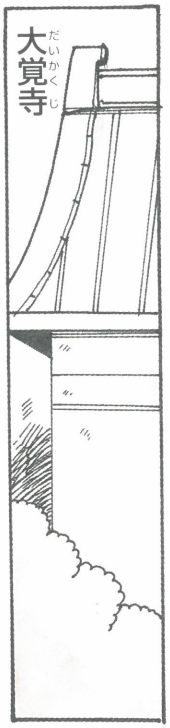
盤珪禅師は今から約三百七十年前、元和八年（一六二二）三月八日、播州揖西郡浜田郷（今の兵庫県姫路市網干区浜田）に生まれました。

盤珪は元気がいい子供で、近くの仲間たちといっしょに、いつも野山をかけ回っていました。

盤珪はよく、家の近くにある揖保川をはさんで、小石をぶつけあう石合戦をしていました。石合戦をしている時の盤珪はきらきらと目を輝かせていました。

おーい、敵のへなちょこ。おれのいる所まで、投げてみろ。

毎年、五月五日の端午の節句には、隣村の子供たちと源氏・平家に分かれての石合戦が行われていましたが盤珪が浜田郷の大将になってからはただの一度も負けたことはありませんでした。



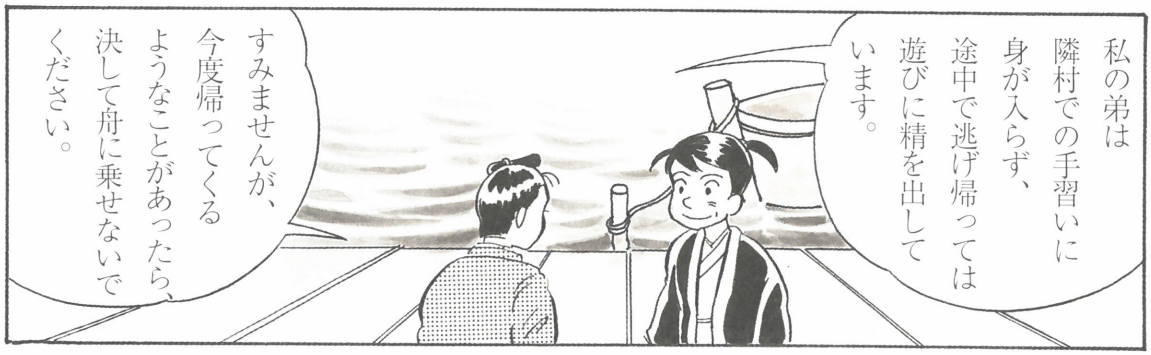
遊ぶことには力を発揮する盤珪でしたが、本を読んだり、字を書いたりすることがきらいでした。

こら

そんな姿勢で正しい字が書けるか。

盤珪は手習いの道具をかたづけ、何食わぬ顔でさっさと寺を抜け出して、家へ帰りました。

盤珪の行動に一番心をいためたのは、体の弱い父の代わりに一家の主人として弟や妹のめんどうを見ていた、医者の兄、正休（しょうきゅう）でした。



乗せてくれない舟には乗ってやるものか。川の底は地続きなんだ。向こう岸までつながっている。さぁ、見ていろ。自分でいってやる。

こらっ

盤珪は、船頭さんがとめるのも気にせず、着物を着たまま川の中へ入り、川底をけっては浮かびながら前へ進み、向こう岸まで行きました。

盤珪さんは、いじっぱりだな。

あーあ

本当。そんなに勉強がきらいだったのかしら。

盤珪は家に帰らず、野原で子供たちとかけっこをして遊びました。

なんというやつだ。しかってやろう。このままにしていてはどんな大人になるやら…。

おい！こっち来いっ

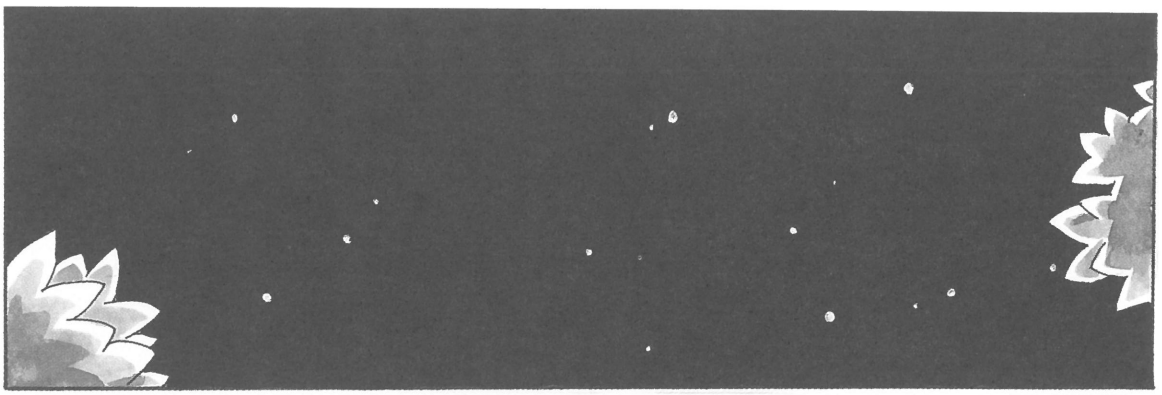
お前は、なんのために手習いに通っているんだ？お前の人柄をみがくために通っているのだろ。分かっているのか。

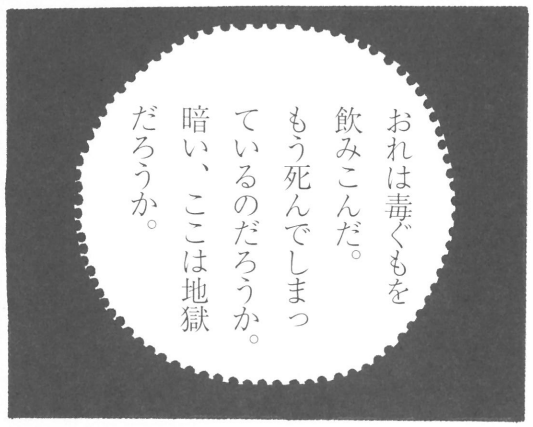
毎日、飯を食べ、遊び回り、あとは眠るだけ。お前という人間はそんなことをくり返すために生まれてきたのか。

盤珪の頭はしだいに下がりぽつりと大きな涙を流しました。

盤珪はすっかりと落ちこんでしまい、家を出てどこに行くともなく、歩いていました。
誰もいない墓場の様子を見て、盤珪はさびしくはかない気持ちになりました。
盤珪は、小さい時から死ぬということが恐くてたまりませんでした。それは盤珪が四、五歳の頃、母が死ぬまねをしたことがあったからです。
いたい
あぁ、死んでしまう。
肩をゆすっても目を覚まさない母の姿に幼い盤珪は驚きました。
何でもないのよ。お母さんは何でもないのよ。
母は盤珪を驚かせすぎたとあわてて抱きしめました。
おれは何のために生きているんだろう。兄さんの言われたことはもっともなことだ。おれには生きていく値打ちがない。
そうだ、いっそこの世から姿を消して、目の前にあるお墓の下に眠ってしまうほうがましかも知れない。どうやって死のうか…。

お墓のかげに「ぶつがん」という仏様が入っている小さな建物がありました。
そうだ、
仏様のところへ行こう。こんなおれでも大切にしてくれるかも知れない。
ッッッ……ッ
あれだ！あれは毒ぐもに違いない。仏様が私のもとにおいでと差し出したものに違いない。
ザッ
盤珪は目の前にいた毒ぐもをつかみ、目をつぶったまま、
ぱっと口の中に入れ、一気に飲みこみました。
すごいことをするね。本当に毒ぐもなのかしら、
？？？
盤珪は目を閉じて、今までのことを思い出したり、母の優しい顔を思い浮かべていましたが、
・・・・・・
いつの間にか、眠りこんでしまいました。
ぐう…




おれは毒ぐもを飲みこんだ。もう死んでしまっているのだろうか。暗い、ここは地獄だろうか。

生きているぞ。昼間のあの仏様だ。
昼間と何もかもいっしょだ。そうか、あれは毒ぐもではなかったんだ。

盤珪には仏様の顔が「しっかりしろよ。しっかり生きろよ。」と言っているように見えました。

帰ろう。帰って兄さんにあやまろう。飯を食い、遊び、眠るだけではない。おれは生きなければならない。

盤珪は、月の光をあびながら胸をはり、一歩一歩、大地をふみしめ、家へ帰って行きました。

盤珪は相変わらず村の子供たちと石投げや相撲をしていましたが村の塾へ通って、学問にも精を出すようになりました。

ある日、『大学』という本を読んでいると、「大学の道は明徳を明らかにするにあり」という言葉に出くわしました。

先生、明徳とはどんなことですか。

明徳とは、明らかな徳のことだ。徳とは、よいことや正しいことが身についていることだ。かげひなたのない立派な人柄のことを言うんだよ。

先生は、明徳とははっきりしている徳のことだと言われました。それなのにさらに『明らかにする』とは、どういうことですか。

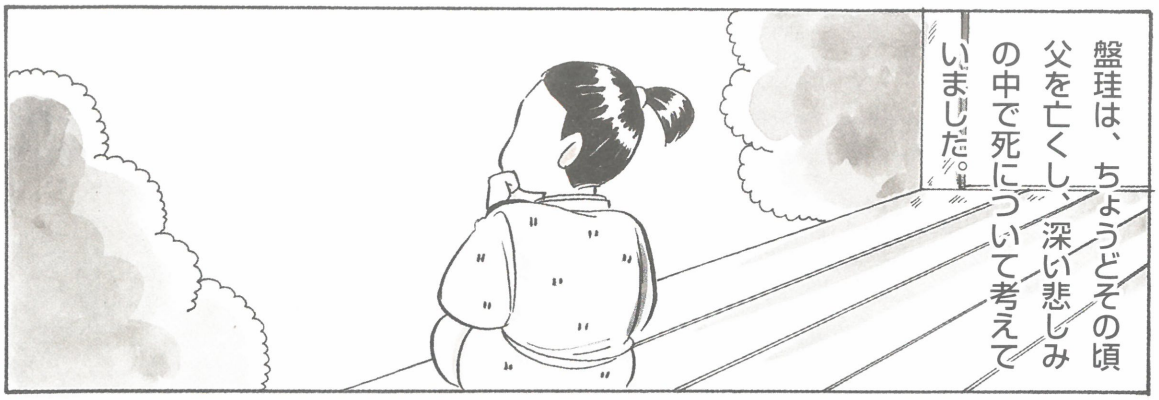
明徳とは人間が生まれながらに持っている徳のことだ。人間の生まれつきの心を言うのだ。

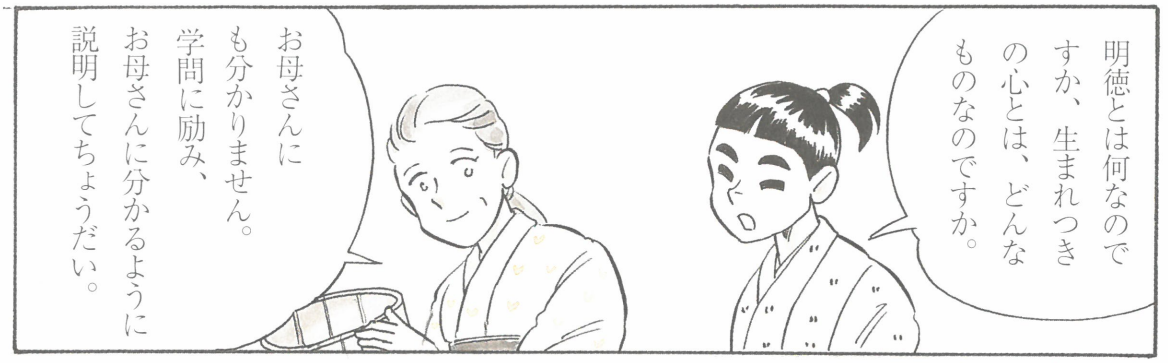
では生まれつきの心とは、どんな心ですか。

……

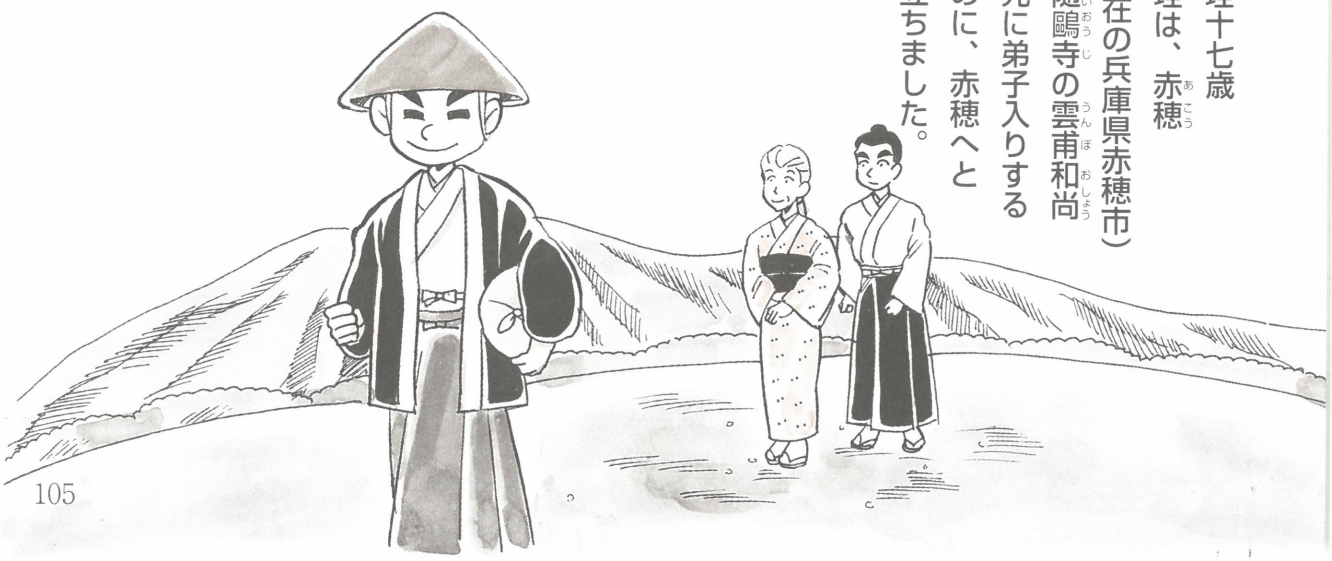
先生は別の言葉に言いかえて説明してくれましたが、盤珪には納得できませんでした。

家に帰り、兄に聞いてみましたが、兄の答えも満足いくものではありませんでした。あまり同じことを繰り返し聞くので、兄に「学問を続けていくうちに分かることだ」としかられてしまいました。





盤珪十七歳
盤珪は、赤穂（現在の兵庫県赤穂市）の随鷗寺の雲甫和尚の元に弟子入りするために、赤穂へと旅立ちました。



盤珪は、毎日和尚の教えを受け、仏様を拝み、むずかしいお経を学びました。

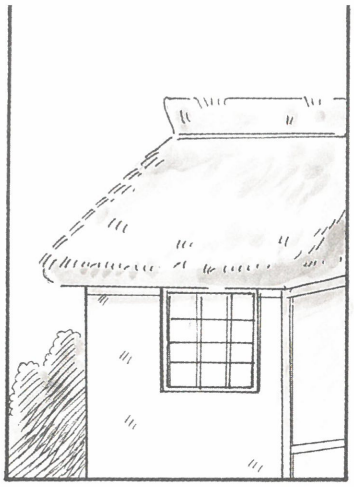
しかし、明徳についても、生まれながらの心についても、良く分かりませんでした。

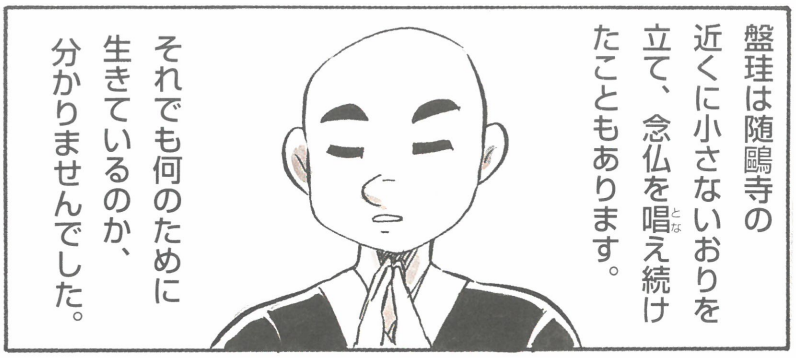
また、よそのお寺に偉いおぼうさんがいると聞けば、行って教えを受けました。

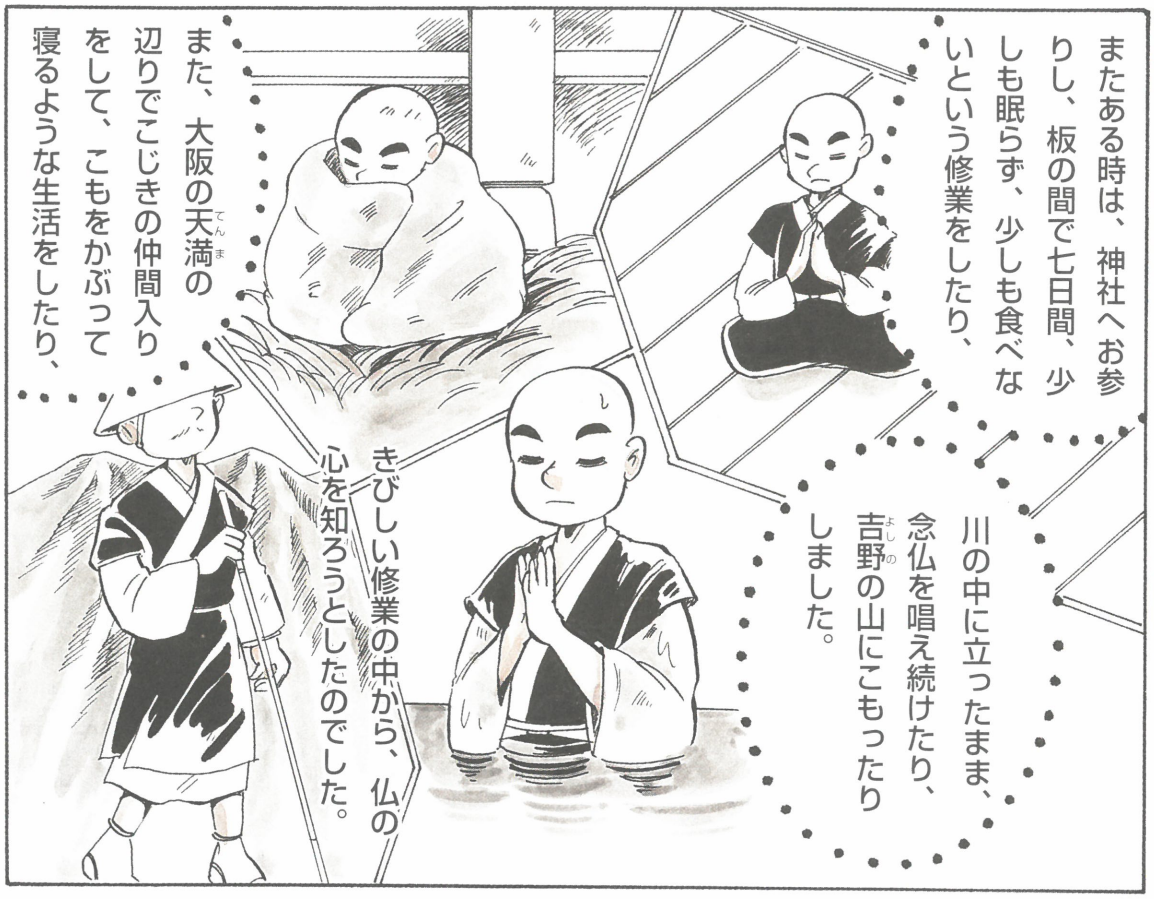
まだ明徳については分からないか。どうだ、座禅をして静かな気持ちになって考えてみなさい。

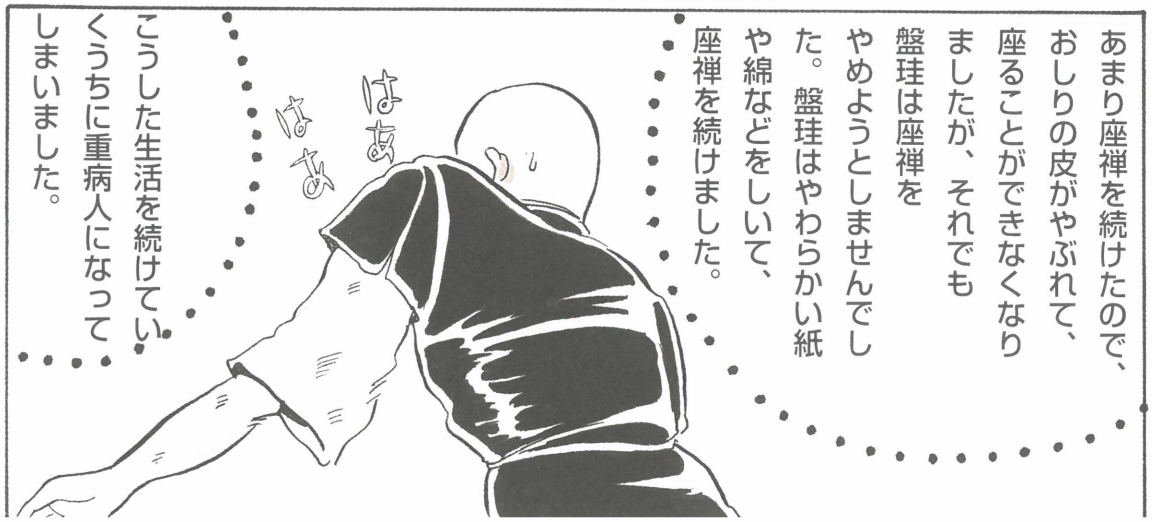
座禅をし、静かに空気を吸ったりはいたりしているうちに、心に静けさとやすらぎがいっぱいに広がってきました。

盤珪は静かに座禅を続けられる場所を求めて、いろいろなところへ出かけて行きました。




盤珪は随鷗寺の近くに小さないおりを立て、念仏を唱え続けたこともあります。
それでも何のために生きているのか、分かりませんでした。


またある時は、神社へお参りし、板の間で七日間、少しも眠らず、少しも食べないという修業をしたり、
川の中に立ったまま、念仏を唱え続けたり、吉野の山にこもったりしました。
また、大阪の天満の辺りでこじきの仲間入りをして、こもをかぶって寝るような生活をしたり、
きびしい修業の中から、仏の心を知ろうとしたのでした。


あまり座禅を続けたので、おしりの皮がやぶれて、座ることができなくなりましたが、それでも盤珪は座禅をやめようとしませんでした。盤珪はやわらかい紙や綿などをしいて、座禅を続けました。
こうした生活を続けていくうちに重病人になってしまいました。
はあ
はあ

盤珪のふるさと―浜田

重病人になった盤珪は、一丈四方（幅三メートル四角）の小屋を造り、小屋全体を土壁にし、入口をふさぎ、誰にもじゃまされず、座禅を続けました。

ゴホ

ゴホ

盤珪は修業を続けましたが、病気はいっそう重くなり、とうとう、血のかたまりをはき出すようになってしまいました。

とうとう死ぬのか。このまま死んでも、別に心残りとは思わないが、仏の心も知らず、母を安心させることもできないまま、あの世にいくのか。

二十六歳の春

ガラ…

ガラ

ある朝、縁側（えんがわ）に出てうがいをしていると、まだ冷たい朝の風が梅の花の香りを運んできました。

梅の香りをうっとりとして味わっていた時、今までの悩みが消えてしまいました。

人間が生まれながらに持っている心はくもりがなく、迷いや欲がない心だけだ。仏の心なのだ。

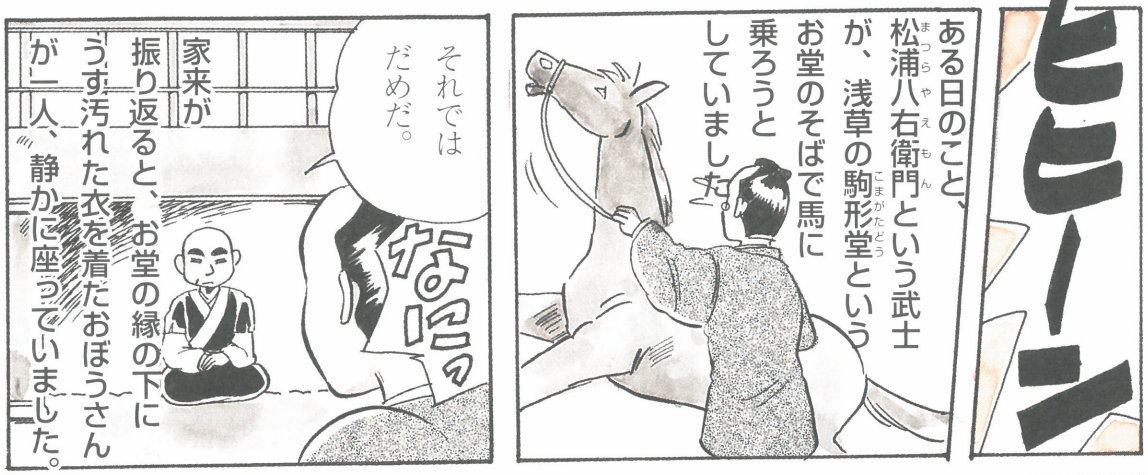
盤珪は、さとりを開いたのでした。

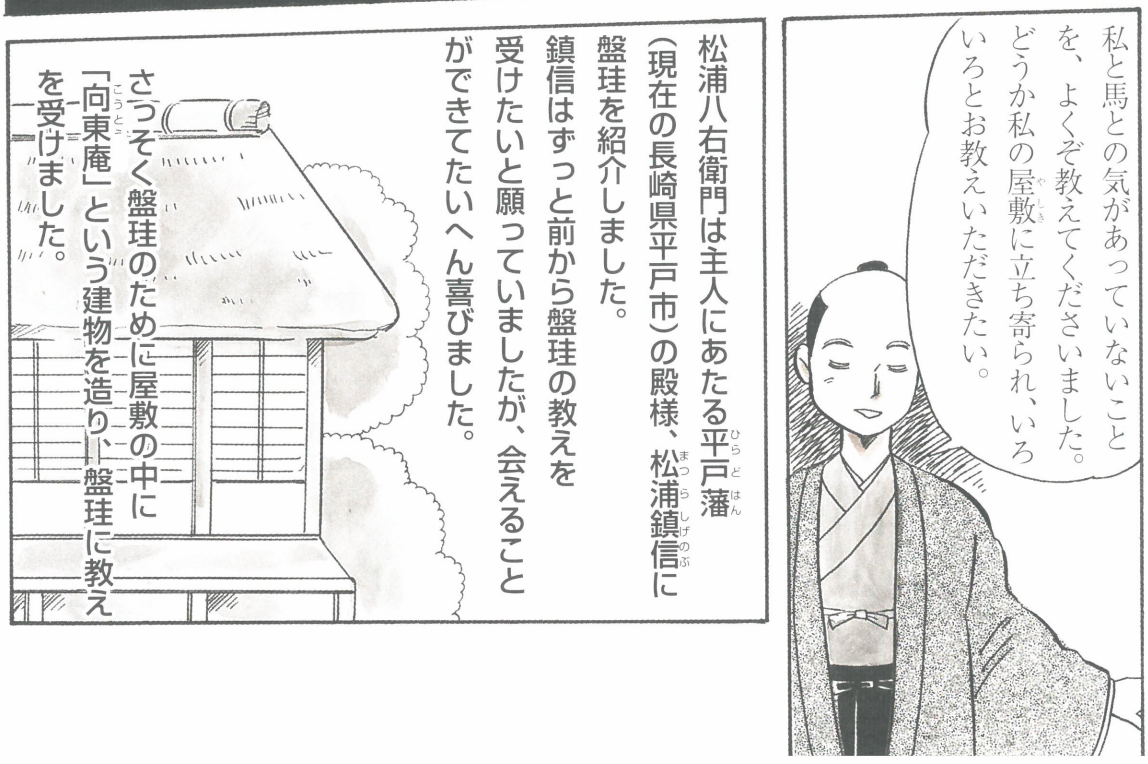
盤珪はさとりを開くと、何ともいえない幸せに満ちた気持ちになりました。

盤珪の食欲は戻り、元の元気な体になりました。
もぐ
もぐ
盤珪がさとりを開いたのは、二十六歳の春。明徳を求めて修業を始めてから、十年近くもたっていました。
人が生まれつき持っているものは、おだやかな、誰をも同じように愛する仏の心だけです。
自分が仏の心を持っていると気付いたなら、この世に生まれ、今生きているということが幸せになるのです。そうなればみんなそのまま仏様になるのです。
盤珪は自分の考えを多くの人々に聞いてもらうために全国を歩き、説法を行いました。
私は生まれつき短気で、どうしても直りません。どうしたら短気が直るのでしょう。
あなたは今短気を持っていますか。あるのならここに出してみなさい。
今はありません。ちょっとした時に短気が出るのです。
それならば短気は生まれつきのものではありません。あなたが自分の気ままで自分勝手に短気な心を出しているのです。人はみんな、生まれつき、仏の心を持って生まれています。よけいなものは一つも持って生まれていないのですよ。

盤珪は全国を回り、江戸の浅草にやって来ました。その頃には盤珪の名前は日本国中に知れわたり、「生き仏様」と言われていました。

しかし、盤珪の姿は修業に苦しんでいた頃と少しも変わりなく、衣がやぶれても、汚れていても自分から新しい衣にかえることはありませんでした。





鎮信は当時、優れたやりの使い手として名が知られていましたが、その鎮信にまさるともおとらぬやりの名人が、大洲藩主の加藤泰興でした。
二人はやりを使う仲間として、大変仲のよい間柄でした。盤珪が鎮信の元にいると知り、泰興もまた、盤珪の教えを受けるようになりました。
泰興は盤珪がいつも落ち着いているので、やりを使って驚かせてみようと考えました。
にっ
家来に案内され客間に座っていた盤珪は何食わぬ顔をしていつものように座っていました。
泰興はここぞとばかり「えいっ」と盤珪の鼻先をめがけてやりを突き出してきました。
ビシッ
殿の腕もまだまだですね。その証拠に腹がすわっておらん。心が先に動いている。
盤珪様はなんと落ち着いているのだろう。生きることも死ぬことも乗り越えた人間の大きさを感じる…。
どうか、私の国元、伊予の大洲へ来てはいただけないでしょうか。新しく寺を造り、国の人々を教え、導いてください。
盤珪は快く泰興の願いを引き受け、大洲へ向かうことを約束しました。

明暦二年(一六五六)、盤珪三十五歳
大洲の殿様の願いにより、伊予の国、大洲へとやって来ました。

やさしい山だ。その下を流れる川も温もりがある。清らかな水の流れの先には白壁の天守閣がある。おぉ、大洲はなんと明るい光に満ちている所なのだろう。

ぼくたちが住む大洲を気に入ってくれてうれしいね。

もっといろいろ見てほしいわね。

盤珪は大洲の自然の中で休んだ後、殿様の菩提寺である龍護山曹渓院に行くように言われていたので、肱川を渡り、寺へと向かいました。

曹渓院を訪れた盤珪はいつもの通り、うす汚れた衣を着ていたので、出迎えたおぼうさんは修業中の者だと思い、寺のはしにあるうす暗い小部屋に案内しました。

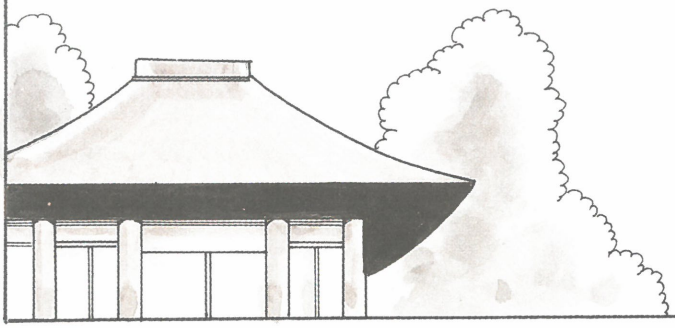
私は盤珪という者ですが、大橋刑部どのに無事着いたと伝えてくださいませんか。

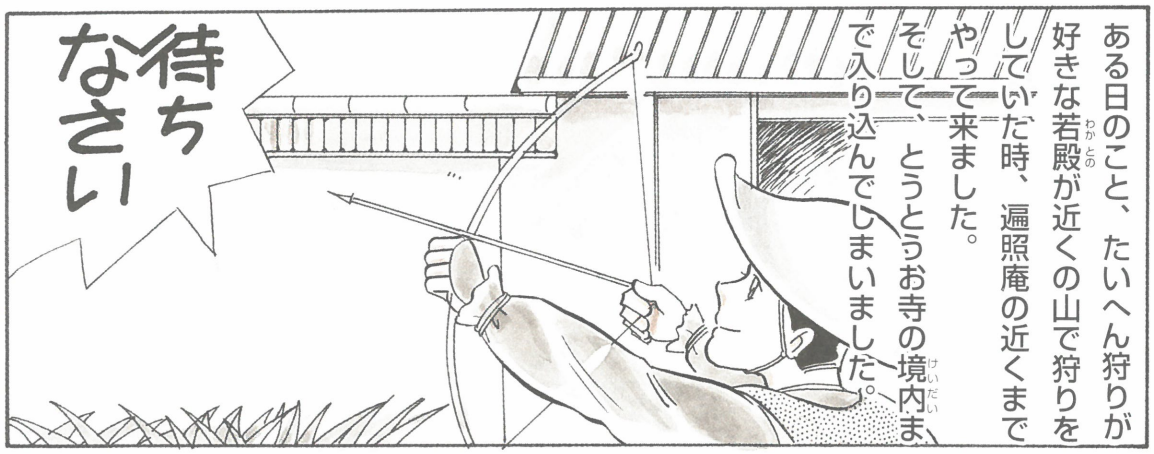
す、すみませんでした。殿様からうかがっておりましたのに。すぐにご連絡して参ります。

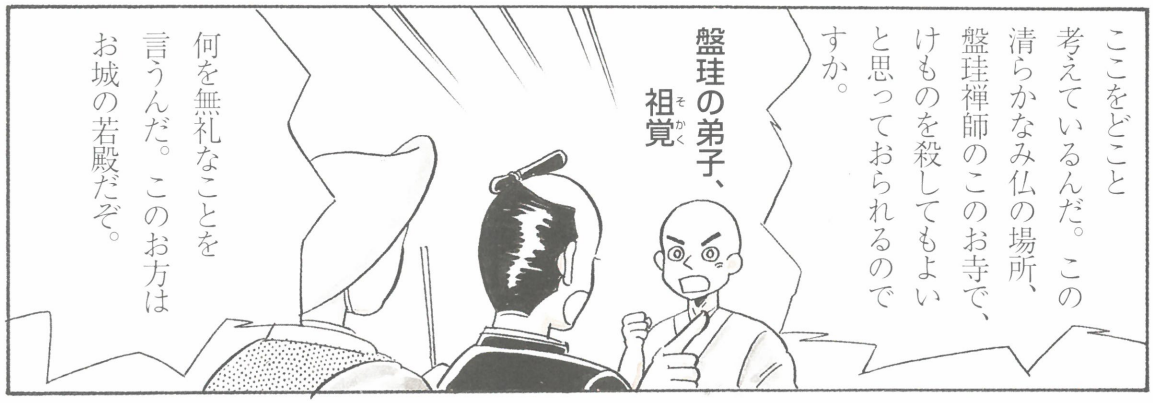
おぼうさんはあわてて、お城まで知らせに行きました。

盤珪は半年ほど大洲にとどまっていましたが、その間、殿様をはじめ、多くの人々に仏の教えを話して聞かせました。

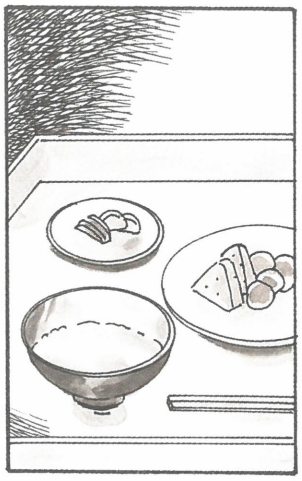
明暦三年（一六五七）、再び大洲へやって来た盤珪のために、殿様はお城の南にある森に遍照庵というお寺を建てました。

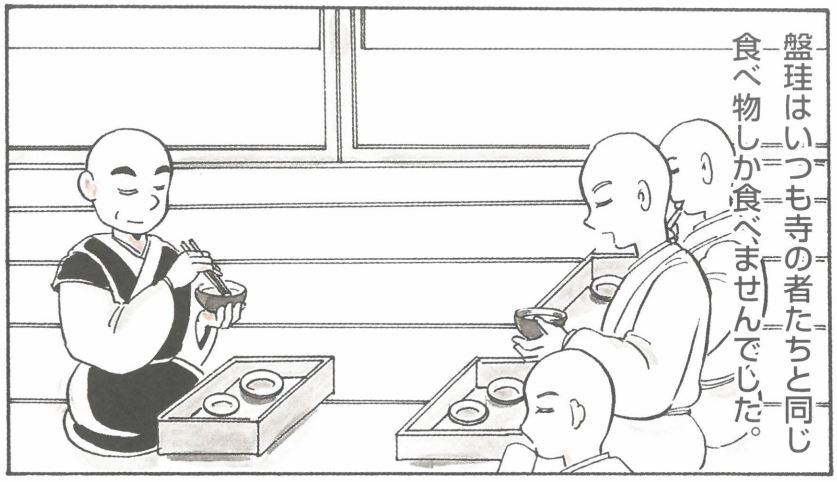






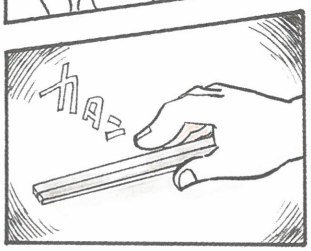
寛文九年（一六六九）の春、盤珪が四十八歳の時、如法寺を建てる工事が始まりました。秋には仏殿や浴室もでき、盤珪も九月三日、大洲へやって来ました。
ある日、若殿兄弟が、如法寺の境内に、けものを追ってふたたび入り込んで来ました。
ワァ
ここはみ仏がおられる清らかな如法寺。自分の楽しみで生き物の命をうばう者が
大手をふって立ち入るとは…。
盤珪はその日のうちに如法寺を出て行ってしまいました。そのことはすぐに殿様のところにも知らされました。
おまえたちはなんということをしてくれたんだ。
天下一の盤珪禅師になんとか帰ってきていただかなければ…。
殿様は盤珪が松山へ向かう道を歩いたと聞いて、いてもたってもいられなくなり、自ら馬に乗って盤珪の後を追いました。
盤珪はたいへん怒っていましたので殿様には会おうとしませんでした。そこで、大橋重次と高昌寺の和尚が一生懸命説得を行い、やっとのことで帰ってきてくれるようになりました。
その後、如法寺の門前には「お寺の境内や、お寺の近くで生き物をころしてはいけない」ということを刻んだ石が立てられました。若殿も、それから決して狩りのために足を踏み入れることはなくなりました。
殺生を厳禁す
如法寺



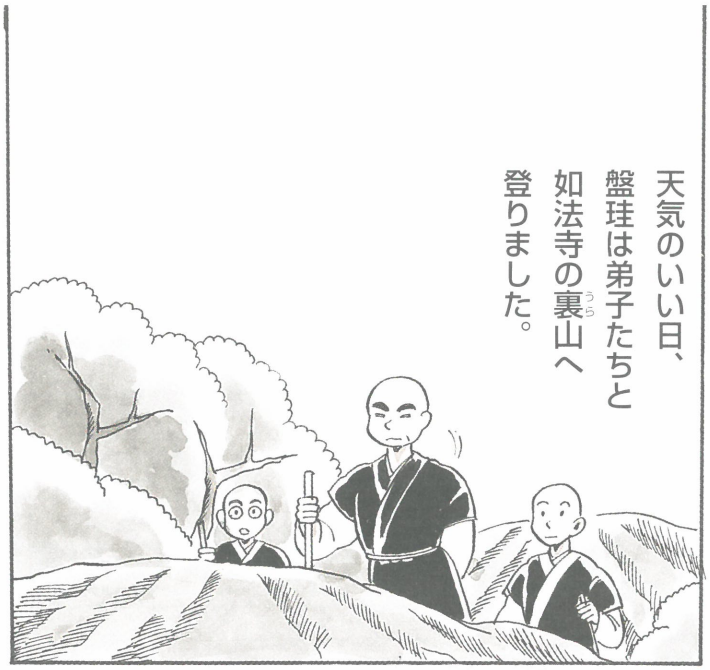

盤珪はいつも寺の者たちと同じ食べ物しか食べませんでした。

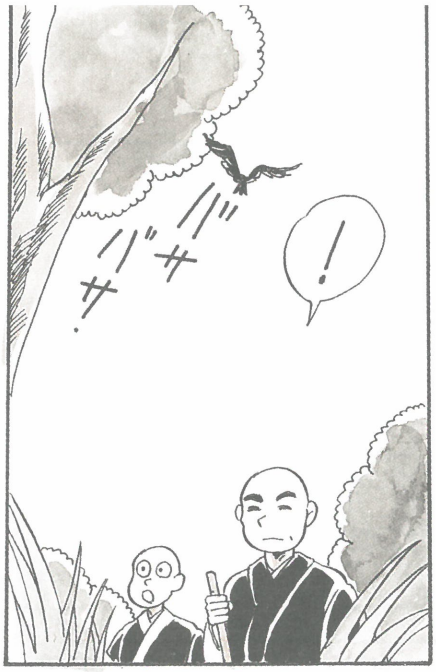
ある時、盤珪は歯が痛くなりました。見かねた弟子は、みんなと別のかまで、特別柔らかく炊いたかゆ飯を出しました。
このかゆ飯はどうしたのだ。

お体のことを思い、みんなとは別のかまで炊いたものです。

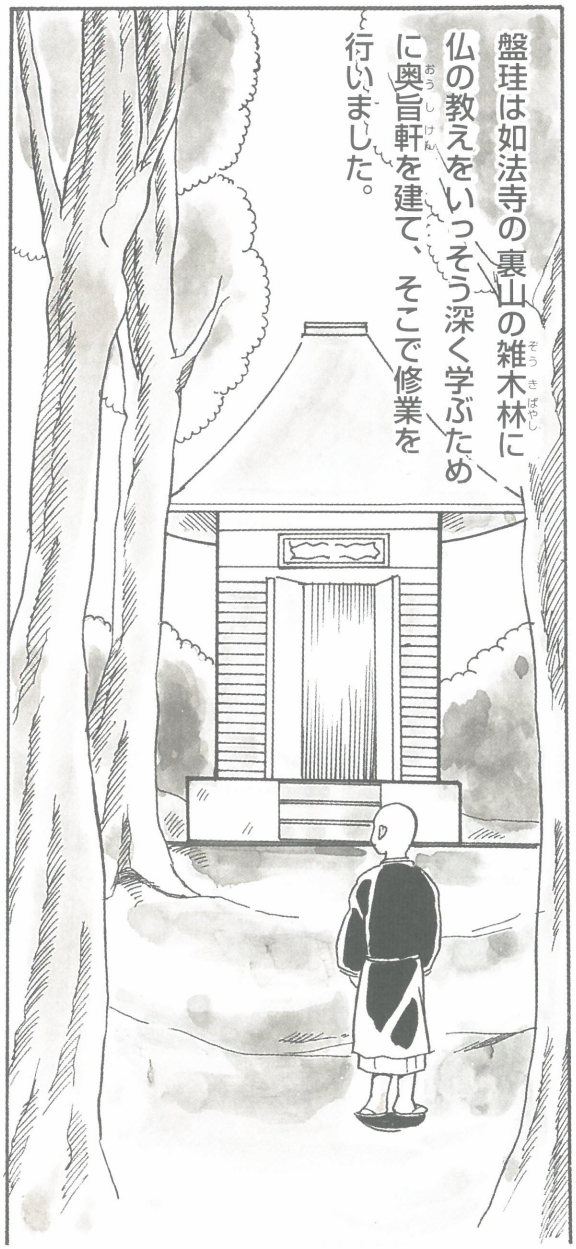

カタン

わたしはみんなと同じものしか食べない。なぜ、特別あつかいするんだ。
盤珪は弟子をきびしくしかり、かゆ飯をさげさせました。

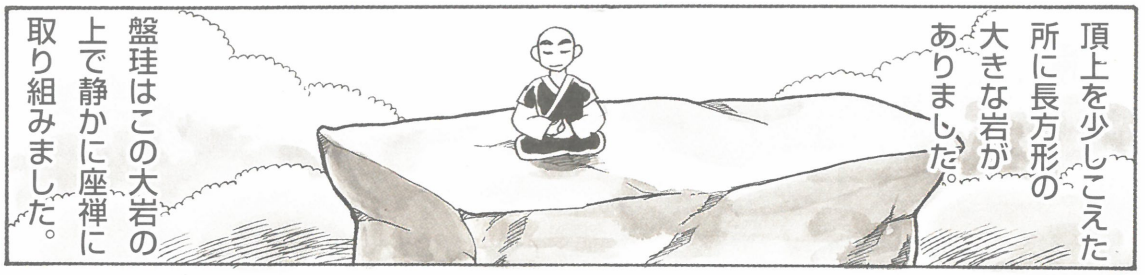

天気のいい日、
盤珪は弟子たちと
如法寺の裏山へ
登りました。


バサバサ
！

昔から流れているこの
肱川の水よりも、人の心は
仏の心で満たされている。
だれもが素直な生まれついて
の真心をもっていることに
気がついた時、人はみな、
生きている幸せを思うのだ。
もっともっと、多くの人に
このことを語りたい。


盤珪は如法寺の裏山の雑木林に
仏の教えをいっそう深く学ぶため
に奥旨軒を建て、そこで修業を
行いました。

忙しい毎日の中から、
盤珪は一人になる時間を
見つけては、如法寺の
裏道を登り、奥旨軒を
通り抜け、冨士山の頂上
へ行っていました。


頂上を少しこえた
所に長方形の
大きな岩が
ありました。
盤珪はこの大岩の
上で静かに座禅に
取り組みました。

岩の上に座ると、天と地と自分が一つになって、
何とも言えず気持ちよく、仏と一つになった
気持ちになるのでした。

盤珪禅師は大洲藩の人々がりっぱな心がけをもつようにと、仕事をする時の歌の文句をいろいろ作って、人々に歌わせました。

仏になりたかりゃれ

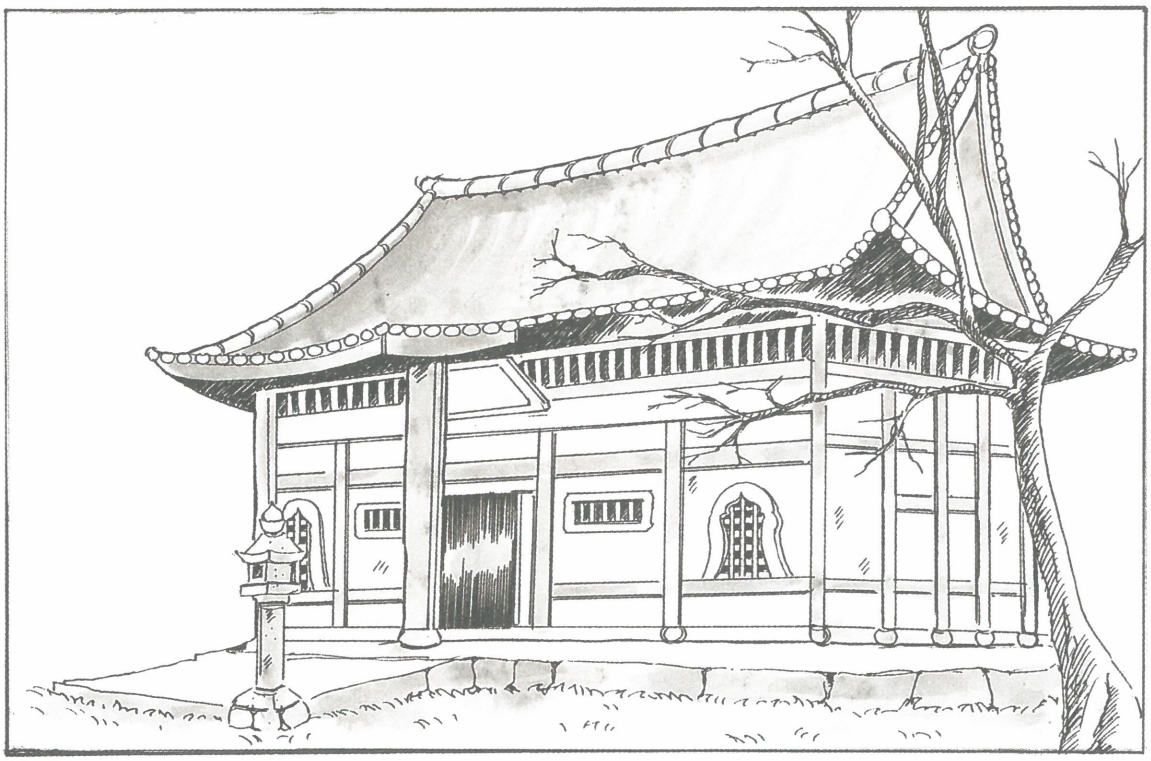
麦をかって、こいで、うすにいれてきねでつく仕事をする時の歌「うすひき歌」

生まれついたる
いきぐ仏
人にうらみが
なにしにあろう
なさけないのが
わが心

伊予で歌われたと同じ歌が、盤珪が修業した播州(現在の兵庫県)、濃州(現在の岐阜県)でも盤珪の歌として、歌われていました。

みんな歌の文句のように素直な生まれついての真心を持ちたいと願いながら一生懸命仕事をしたんだろうね。

延宝五年（一六七七）、加藤泰興死去。
盤珪は加藤泰興をあつくとむらいました。
盤珪は元禄六年（一六九三）、七十二歳での世へと旅立ちました。
盤珪の教えを受けたのは五万人余り。
盤珪が新しく建てたり、造り替えた寺は、五、六十ヵ所。その中でも龍門寺（姫路）、光林寺（東京）、如法寺（大洲）は、盤珪の三大寺として今でも多くの人々に親しまれています。
重要文化財「如法寺仏殿」



盤珪禅師年譜

年号（西暦）	主な事がら
元和八年（一六二二）	三月八日、播州揖西郡浜田郷（現在の兵庫県姫路市）に生まれる
寛永十年（一六三三）	「明徳」とは何か、疑問を持つ
寛永十五年（一六三八）	雲甫和尚の弟子になり、修業をはじめる
寛永十八年（一六四一）	修業をしながら全国行脚をはじめる
正保四年（一六四七）	大病の中から、さとりを開く（その教えを不生禅という）
明暦二年（一六五六）	加藤泰興の招きにより、大洲に来る
寛文九年（一六六九）	大洲の冨士山に如法寺を開く
延宝六年（一六七八）	大洲に来て、泰興をとむらう
元禄六年（一六九三）	九月三日、龍門寺で亡くなる（七十二歳）